

中学校社会科におけるよりよい社会を構想する力の  
育成：  
歴史的分野の单元「中世の日本」の実践の分析を通  
じて

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2024-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 弘力, 鈴木, 智晴, 矢崎, 祐亮 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/0002000292">https://doi.org/10.14945/0002000292</a>

## 中学校社会科におけるよりよい社会を構想する力の育成

—歴史的分野の単元「中世の日本」の実践の分析を通じて—

小林 弘力<sup>1</sup> 鈴木 智晴<sup>2</sup> 矢崎 祐亮<sup>3</sup>

(静岡大学教育学部附属島田中学校<sup>1</sup> 島田市立金谷中学校<sup>2</sup> 焼津市立焼津中学校<sup>3</sup>)

A Study of Improving Students' Ability to Conceive the More Satisfied Society

in Junior High School Social Studies

Kobayashi Hirochika, Suzuki Tomoharu, Yazaki Yusuke

### 要旨

中学校社会科において、現代の社会を考察し、目指していくべき社会を構想するために、弱者に目を向けた教材開発に取り組んだ。それに関連して、歴史的分野や地理的分野での学習を一般化して実社会につなげるために、「サティスファイド」と「ディサティスファイド」という視点から敢えて二元的に社会を捉えることを試みた。ここでは、静岡大学教育学部附属島田中学校、島田市立金谷中学校、焼津市立焼津中学校での実践事例を通して、これらの有効性について検証したい。

キーワード： サティスファイド ディサティスファイド 弱者 中世 多面的・多角的 実社会

### 1. 本実践について

本実践は、主に以下の2点の課題意識を出発点としている。

- (1) 歴史的分野の学習をいかに実社会と結びつけるか
- (2) 生徒たちと共有すべきよりよい社会とは何か

(1)について、令和2年度の静岡大学教育学部附属島田中学校(以下、島田中学校)の授業実践では、実社会に通じる歴史的事象を、政府と国民(為政者と民衆)との関りに求めた。近世から現代にかけての政府と民衆との関係の変化に着目することで、民主主義への意識や公民としての自覚を身につけさせようと考えた。

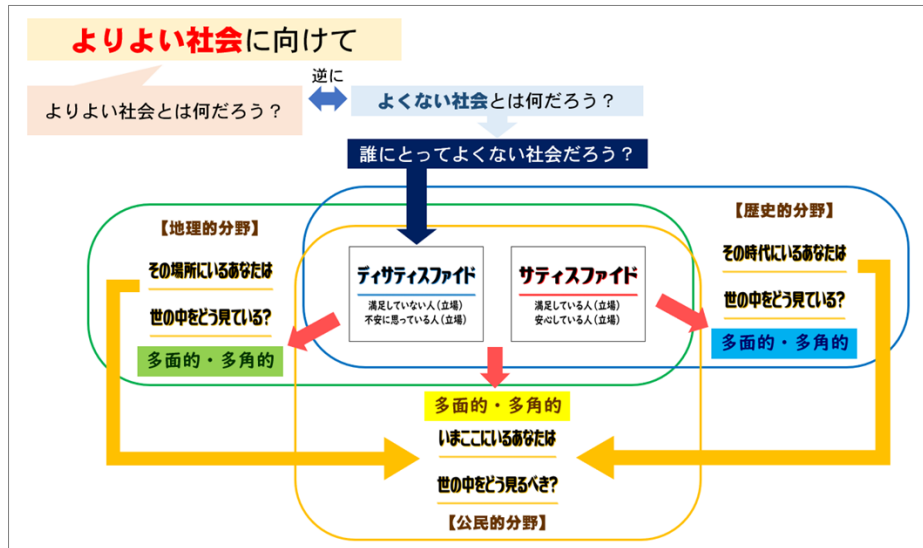
しかし、現代の政府と国民の関係と、近世や近代における政府と民衆との関係には、生徒たちのイメージの中で大きな隔たりがあった。あまりに異なる政治体制や時代背景から、政府の連続性や民衆との関係の変容を捉えるには不十分であった。

そのため、歴史的分野の学習を基礎として現代社会の見方や考え方を涵養するためには、さらに一般的な視点が必要であると考えた。

そこで、時代や場所を超えて歴史的事象に共通してみられる「困っている人が歴史を動かす(不満を抱えている立場が社会に働きかける)」という大きな見方から歴史を捉えることを試みた。歴史を見れば、良くも悪くも社会の変革をもたらしてきたのは、現状に満足していない立場、社会に不満をもっている立場であるということは明確である。社会に変革をもたらすほどの行動を起こすためには、相応のエネルギーが必要であり、変革の後の社会を求める動機が存在するからである。一方で、社会の現状維持を求める立場、変化を嫌う立場によっては、良くも悪くも社会に安定が与えられている。

これらは、歴史的事象を観察したり考察したりすることで得られる見方・考え方であり、現代の社会を考察したり、未来の社会を構想するためにも役立つものではないだろうか。

(2)について、社会科の授業が目指すべきは、生徒たちが主体的に社会に参画するための資質や能力を身につけ、将来よりよい社会を実現させていくことである。それでは、よりよい社会とはどのような社会なのだろうか。生徒たちは、どのような社会を目指していくべきなのだろうか。恐らく生



(図1 サティスファイド・ディサティスファイドの視点を中心とした授業のイメージ)

徒たちは類似したイメージをもちながら、それは同じ程度にぼやけたものである。社会科の学習を重ねながら、目指していきたい社会についてのイメージを具体的なものにしていく必要があると考えた。OECDは、Education2030の中で、持続的に良好・幸福な状態であるウェルビーイングを目標として想定しているが、十分に具体的なものではない。

よりよい社会がどのようなものであるのかについては非常に捉えたいが、よくない社会がどのような社会かについては比較的容易に想像ができる。少なくとも、一定の立場にある人々が、他の立場と同様の幸福を享受できていない社会は、改善の余地のある社会であると言える。

生徒とともによりよい社会について考える中で、弱者に目を向ける授業づくりを試みた。

(1)と(2)を踏まえ、良くも悪くも社会の変化を求めたり、そのために行動したりする立場を分析すれば、分野を問わず、社会に対して何らかの不満や不安を抱えている立場であるという点で共通点がある。そしてそのような立場に目を向けることで、実社会における弱者にも迫ることができると考えた。

ここではそのような立場を「ディサティスファイド」な立場とする。一方で、社会の均衡を保とうとするのは社会に満足していたり、既得権益があったりする立場であると考え「サティスファイド」とする。また、ディサティスファイドには、感じている満足に持続性がない場合や、比較対象がないために不満を感じない場合、違和感を感じつつも未完成な社会を受け入れている場合も含んでおり、そのため「不満」という言葉とは微妙に異なるニュアンスをもつと考える。

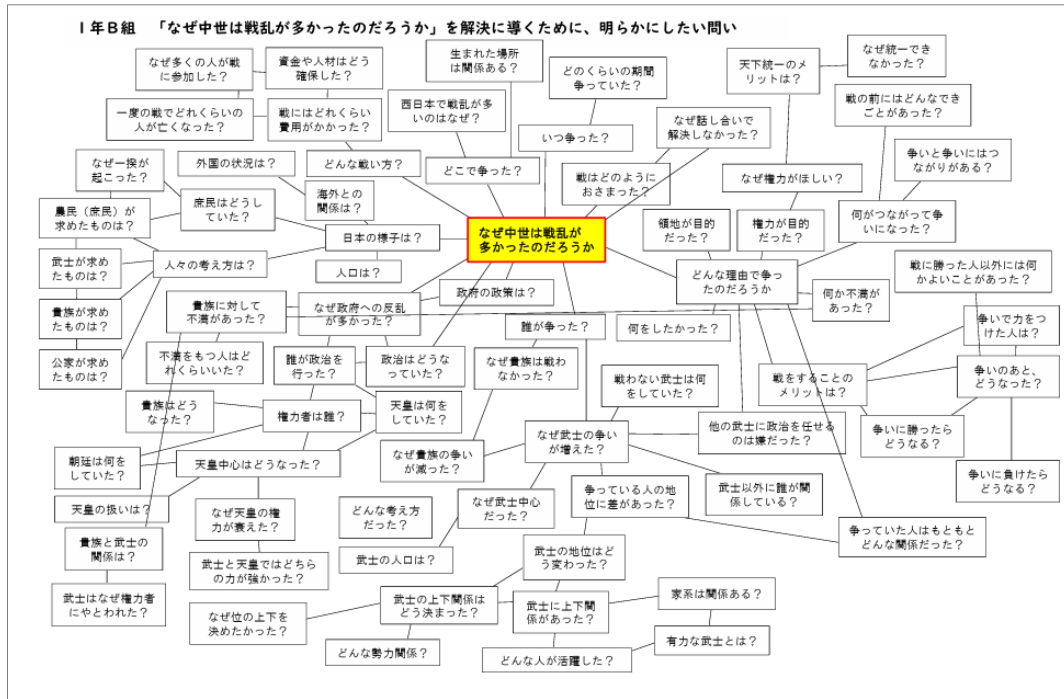
社会に存在する立場をサティスファイドとディサティスファイドに二分することは、社会的事象の多面的・多角的な考察の妨げになるように見えるが、どの時代にもどの地域にも共通するであろうこの見方を獲得すれば、生徒の考え方は自発的に様々な立場や視点を意識したものになっていくであろう。そのため、日々の授業の中でサティスファイドとディサティスファイドのレンズを通した考察や構想を重ねることは、歴史、地理、公民的分野のより深い理解にもつながると考える。

なお、例えば同じ立場であっても経済という視点でのサティスファイドと安全という視点でのディサティスファイドは両立し得るし、同じ状況であってもある立場にとってはディサティスファイドで別の立場にとってはサティスファイドであるということも起こり得る。自分以外の誰かのディサティスファイドを代行して社会の変化を試みる人物もいる。(社会における課題を自分事としてとらえる姿の一面であると考え。)以上のことをまとめたものが(図1)である。

## 2. 島田中学校での授業実践について

本実践の中心とした単元では、歴史的分野B(2)「中世の日本」を扱った。本単元では第1時で、日本の戦乱について示された資料の読み取りを通して、「なぜ中世は戦乱が多かったのだろうか」という問い(単元課題I)をもたせた。

また、単元課題Iを解決するためには、どんな知識が必要なのか、何について知らなければいけないのか(単元課題を解決するために解決したい問い)について生徒に見立てさせたので、参考のため(図2)に示す。



(図2 生徒が構想した「単元を解決するために解決したい問い」)

単元課題Ⅰは、単元を通して中世の日本についての理解に向かうための問いであり、単元課題Ⅰの追究を通して、主に以下のような見方を獲得させた。

- ・武士はどのように力をつけたのか
- ・武家政権のような仕組みであったのか
- ・朝廷や貴族は武家政権をどう見ていたのか
- ・武士は武家政権をどう見ていたのか
- ・民衆はどのように力をつけたのか

単元課題Ⅰについて考察しながら、中世の日本を大観し、多くの戦乱が起こった背景について理解した生徒は同時に、多くの戦乱に共通する要因であるディサティスファイドへの認識も深める。そこで、第14時の議論の後、学習課題Ⅰに関連づけて、学習課題Ⅱ「中世のディサティスファイドはなぜ生まれたのか」を問いかけた。

これまでの歴史学習においては、朝廷の立場、武家の立場、民衆の立場、など、歴史的背景が強く影響する立場について個別に考察しており、我々が生きる現代の社会の立場に置き換えることはされてこなかったように思う。そこで学習課題Ⅱでは、中世の社会の変化について動的に構造的に捉え直す。この構造は、既得権益と新興勢力の対立、民衆の参入などを内包しており、現代の社会との重なりが見られると考える。単元課題Ⅱの考察や議論を通して、歴史的分野の学習を歴史的分野で止めず、現代社会を捉える見方や考え方につなげるとともに、その手応えを実感させようとした。

(表1)は、本単元の単元構想についてまとめたものである。

(表1 本実践の単元構想)

時	学習課題・学習活動	サティスファイド/ ディサティスファイド
第1時	<p>【本時の学習課題】 日本史上の戦乱を比較しよう。</p> <p>○中世に多くの戦乱が起こったことから、単元を貫く問いをつかむ。</p> <p>【単元の学習課題Ⅰ】 なぜ中世は戦乱が多かったのだろうか。</p> <p>○「なぜ中世は戦乱が多かったのだろうか」という問いを解決するために、これからの単元で何を明らかにしていくのか、見通しをもつ。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「武士とは何だろうか」</li> <li>・「争いの原因は何だったのだろうか」</li> <li>・「現代と中世とでは何が違ったのだろうか」</li> <li>・「朝廷は争いを抑えなかったのだろうか」</li> </ul>	
第2時	<p>【本時の学習課題】 武士はどのように力をつけたのだろうか。</p> <p>○土地を守るために武装した武士が、朝廷や貴族と結びつきながら力をもつようになったことを理解する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「武士は権力者によって組織されたものではなく、自然におこったものなのか」</li> <li>・「対立や争いを武力で解決できる武士は、権力者にとって欠かせない存在になったのだろうか」</li> </ul>	<p>サティスファイド</p> <p>武士</p> <p>ディサティスファイド</p> <p>朝廷</p> <p>天皇</p> <p>貴族</p>
第3時	<p>【本時の学習課題】 平清盛は、武士か、貴族か、それとも僧侶か。</p> <p>○武力によって力をつけた平清盛は、朝廷の組織や貴族の社会に同化していったことを理解する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p>	<p>サティスファイド</p> <p>平氏</p> <p>ディサティスファイド</p> <p>朝廷</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>「平清盛の政治は、武士が実権を握った政治と言っても、貴族の政治と同じことをやっていたのだな」</li> </ul>	貴族 平氏以外の武士
第4時	<p>【本時の学習課題】 武士はなぜ源氏について平氏と戦うことにしたのだろうか。</p> <p>○平清盛が強固な独裁体制を敷く中で、地方での平氏による圧力への不満と、所領の安堵への期待から、東国を中心とした武士が源氏を後押ししたことに気づく。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「地方の武士にとって、平氏への大きな不満は先祖代々の土地を支配されることだったのだろうか」</li> <li>「武士が源氏についた理由は、土地の支配という自分たちの利益につながるからだったのだろうか」</li> </ul>	サティスファイト 源氏 源氏の武士 ディサティスファイト 平氏 平氏の武士 朝廷 貴族
第5時	<p>【本時の学習課題】 朝廷か幕府か… 御家人が進むべき道を考えよう。</p> <p>○朝廷が権威に基づいて御家人を動員しようとしたことに対して、幕府は御恩と奉公の関係によって御家人とつながっていたことに気づく。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「朝廷は権威によって、幕府は権利によって御家人とつながっていたのか」</li> <li>「東国と西国、地域によっても結びつきの強さが違ったのか」</li> <li>「承久の乱での敗北やその後の処分は、朝廷にとっては屈辱的なものだったろうな」</li> </ul>	サティスファイト 鎌倉幕府 北条氏 幕府側の御家人 ディサティスファイト 後鳥羽上皇 朝廷 貴族 朝廷側の御家人
第6時	<p>【本時の学習課題】 元の手ごわさと御家人の頑張り、恩賞奉行にアピールしよう。</p> <p>○ユーラシア大陸の広い範囲を支配する元が日本に侵攻したことや、それによって幕府と御家人の関係が揺らいだことを理解する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「所領を期待して戦支度を整え、北九州に赴いた御家人はがっかりしたのだろうか」</li> <li>「幕府としても、恩賞が与えられないのは心苦しいのではないだろうか」</li> </ul>	サティスファイト ディサティスファイト 御家人 鎌倉幕府 元
第7時	<p>【本時の学習課題】 永仁の徳政令は、世の中にどのような影響を与えたのだろうか。</p> <p>○永仁の徳政令は、土地を購入した者だけでなく、長期的な視点では御家人をも苦しめることになったことに気づく。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「一時的に救済はされても、相続の仕組みから御家人は困窮から抜け出せないな」</li> </ul>	サティスファイト 朝廷 貴族 ディサティスファイト 土地購入者 御家人 鎌倉幕府
第8時	<p>【本時の学習課題】 鎌倉時代の新しい教えは、社会にどのような影響を与えたのだろうか。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「人々が救われるのであれば、宗教のかたちは多様でよいのではないかと思う」</li> </ul>	サティスファイト 庶民 武士 開祖 ディサティスファイト もともの縁

第9時	<p>【本時の学習課題】 鎌倉幕府に代わる政治はどのようなものだったのだろうか。</p> <p>○鎌倉幕府に代わる政府に対して朝廷や貴族が期待する政策と、武士が期待する政策には矛盾が生じてしまうことに気づく。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「貴族も武士も、ひとつの枠しかない政治の実権を奪い合っていたからではないか」</li> <li>「もともと政治を行っていた貴族にとっては武士の政権が、実力をつけた武士にとっては貴族の政権が、受け入れられなかったのではないか」</li> </ul>	サティスファイト 鎌倉幕府 足利尊氏 ディサティスファイト 後醍醐天皇 (足利氏)
第10時	<p>【本時の学習課題】 足利義満のサティスファイトを支えた大きな要因は何だろうか。</p> <p>○足利義満が大きな権力を握った要因について、政策やできごとと関連付けながら理解する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「足利義満は室町幕府の最盛期を築いたんだな」</li> <li>「足利義満のサティスファイトに対しては、ディサティスファイトな立場は生まれなかったのだろうか」</li> </ul>	サティスファイト 足利義満 日明の商人 ディサティスファイト 南朝 朝廷(北朝) 貴族 倭寇
第11時	<p>【本時の学習課題】 強固な支配体制は、戦乱を招くか防ぐか。</p> <p>○強固な支配力が戦乱を招くのか、薄弱な支配力が戦乱を招くのか考察する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「強すぎる権力は人々の不満をも抑えることができるのではないだろうか」</li> <li>「安定した社会のためにはお強い支配も必要なのではないか」</li> </ul>	サティスファイト 戦国大名 ディサティスファイト 室町幕府 足利義満 京都の人々 朝廷 貴族
第12時	<p>【本時の学習課題】 殿に天下取りの献策をしよう。</p> <p>○戦国大名が行った政策について、下剋上の風潮や経済の発展に関連付けて理解する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「戦乱の時代を生き抜くために、どれも必要な政策ではある」</li> </ul>	
第13時	<p>【本時の学習課題】 民衆はどのように力をつけたのだろうか。</p> <p>○古代、一方的に搾取されていた農民などの民衆が、中世を通して力をつけていった過程を、政治などの時代背景に関連付けて理解する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「苦しかった庶民は、同じ立場で団結したり、農耕技術を向上させたりすることで力をもったんだな」</li> <li>「庶民の成長も、戦乱を増やす原因になったんじゃないかな」</li> </ul>	サティスファイト 民衆 ディサティスファイト 民衆 権力者
第14時	<p>【本時の学習課題】 なぜ中世は戦乱が多かったのだろうか。</p> <p>○単元課題Ⅰについて、既習事項を総括して多面的・多角的に考察し、中世の特色をからめながら表現する。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「武士が登場したことにより、戦力による権力者が現れたからだと考える」</li> <li>「ディサティスファイトな人々が、戦いによ</li> </ul>	

	ってサティスファイドを得ようとしたからだと考える。」	
第15時	<p>単元の学習課題 中世のディサティスファイドは、なぜ生まれたのだろうか。</p> <p>○中世に多く起こった戦乱の要因であるディサティスファイドが、どのように生じたのかについて、自分なりの考えをもつ。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <p>・「ディサティスファイドは、サティスファイドとの関係の中で生まれるのではないだろうか。」</p>	
第16時	<p>本時の学習課題 中世のディサティスファイドは、なぜ生まれたのだろうか。</p> <p>○中世のディサティスファイドがなぜ生まれたのか、歴史的事象を根拠に、多面的・多角的に考察し、議論しながら自分の考えを深める。</p> <p>【授業の終末で想定する生徒の思い】</p> <p>・「社会の動きとサティスファイド/ディサティスファイドは互いに影響し合っているんだな。」</p>	

単元を通して、生徒たちにはそれぞれの授業で扱った事象においてサティスファイドだった(サティスファイドになった)立場や人物とディサティスファイドだった(ディサティスファイドになった)立場や人物を毎時間振り返らせ、次の授業のはじめに共有した。

授業を重ねるごとに、「反乱(承久の乱)を起こしたということは、朝廷にはディサティスファイドがあったのではないか」「(永仁の徳政令を出して)借金を帳消しにしたかったということは、御家人の困窮は幕府にとってもディサティスファイドだったのではないか」など、変革をもたらそうとした行為からディサティスファイドであった立場を推測する姿が見られるようになった。また、中世における朝廷と幕府の権力をめぐる互いの関係から、一方がサティスファイドになればもう一方がディサティスファイドになることに気づき、互いがサティスファイドになる手立てはなかったのかと

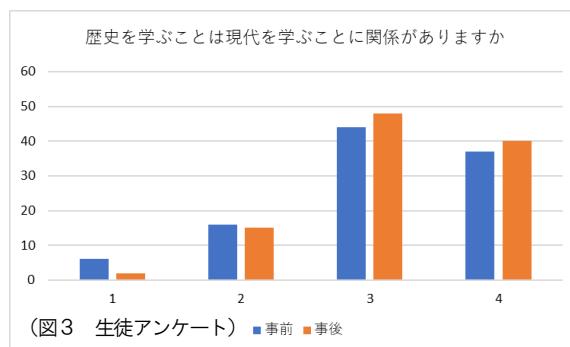
主体的に構想するようになった。

単元課題Ⅱである「中世のディサティスファイドは、なぜ生まれたのだろうか」という議論を経て、ある生徒は「当時の時代背景の特色である権力と階級がなければ、現代社会でも同じ構図が見られるのではないか」と発言した。歴史の学習を通して、現代の社会に通じる見方・考え方を習得したと言える。

### 3. 生徒アンケートより

次に、授業前後で生徒に実施したアンケートをもとに、今回の実践の成果と課題について振り返りたい。

(図3)は、「歴史を学ぶことはあなたが現代社会を生きることに関係があると思いますか(授業実践後は「中世を学ぶことは」に質問を変更)」という質問についての回答結果である。1に近づくほど「そうは思わない」、4に近づくほど「そう思う」という回答である。



量的変容については微増であるが、理由には主に次のようなものがあつた。

(事後アンケートで3または4と回答した理由)

- ・中世の戦乱の原因は、今の戦争がなぜ起こったのかが自分でも考えやすくなると思うから。
- ・戦いによって生まれる、サティスファイドとディサティス



(参考：授業後の板書)

ファイドがどのような気持ちなのかを考えることで、全ての人がサティスファイドになれるにはどうしたらいいかなど、他者の気持ちを考えることができるから。

- ・サティスファイドやディサティスファイドについて考えることが、今の戦争や事件などたくさんの方に共通していると思ったから。
  - ・ディサティスファイドが生まれる理由というのが、今の政治につながると思ったから。
- (事後アンケートで1または2と回答した理由)
- ・中世は戦乱や貴族などの戦が多く、庶民の暮らしや課題についてあまり考えず、武士などに視点が多く写ったのであまり現代社会に生かせることがなかったから。
  - ・中世に起こったことや人は直接現代に関係している訳ではないから。
  - ・例えば「昔建武の新政を行ったから、法律で同じようなことをやろう」とはならないから。
  - ・今の社会と中世は仕組みが完全に同じではないと思うから。

3または4と回答した理由からは、社会全体のサティスファイドに目を向けようという思いや、現代の社会に通じる課題を考える視点として活用しようという思いが伺える。一方で、1または2と回答したものからは、歴史的な個別の事象そのものから現代社会を生きるヒントを見つけ出そうという意識から、歴史的背景や社会の構造の違いが現代社会との隔たりを生み出していることが伺える。この点からも、コンテンツを学ぶ歴史学習から、コンピテンシーを学ぶ歴史学習への変換が、歴史の学びを現代社会を生きる手掛かりにつながる鍵を握っていると考えられる。コンピテンシーのひとつとして、サティスファイドとディサティスファイドという社会の見方は、歴史的な分野、地理的な分野、公民的な分野に共通するものになり得るのではないだろうか。

#### 4. 公立中学校での授業実践

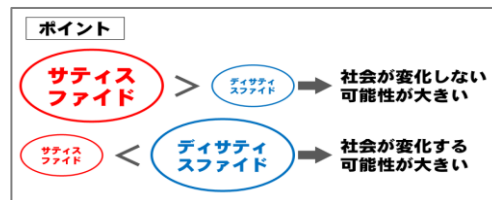
本実践では、本校教科研究協力委員の鈴木智晴教諭（島田市立金谷中学校）と矢崎祐亮教諭（焼津市立焼津中学校）の協力を得て、公立中学校での実践を行った。ここからは、それぞれの授業実践での成果についてまとめた。

##### (1) 鈴木智晴教諭（島田市立金谷中学校）の授業実践

鈴木教諭は、地理的分野C（3）「日本の諸地域」を扱った。歴史的な分野の学習を現代社会に通じる見方・考え方につ

なげることを目的とした今回の研究であるが、鈴木教諭の実践から、地理的分野への応用についても検討していきたい。

前述したとおり、良くも悪くも社会の変容を求めるのはディサティスファイドな立場である。それは地理的事象においても共通することである。鈴木教諭は、サティスファイドやディサティスファイドと社会の変化について（図4）を用いて生徒と共有した。



（図4 鈴木教諭が示した図）

鈴木教諭は、近畿地方が今後どのように変化していくかを構想する授業を実践した。（図5）は「近畿地方には、社会の変化を促す（サティスファイドを上回る）ようなディサティスファイドがあるだろうか」という問いに対する生徒の記述である。\*（図5）からも分かるように、ディサティスファイドの内容を改善することが、そのまま「どのような社会を構想したらよいか」の内容に結びつくため、生徒が思考を整理する上でも有効であると言える。

変化を促すディサティスファイドが・・・ある・ない  
 琵琶湖の汚水。生活用水や工業用水として使えぬ水が溜まってし物ため、水をきれいにするため、リン酸を含む炭酸イオンは、天然、油脂と原料とした粉石けんを使うことでいかにしてか、対策としていけば、生活用水や工業用水として使えぬ水が増える。  
 0 中世の場が汚い。... 汚い水が溜まるので、海外まで他の企

（図5 生徒の記述）

授業を受けた生徒に聞き取ると、「どの単元の学習でも、何を考えればよいか（誰にとって何がサティスファイドであるか、またはディサティスファイドであるか）の視点が明確であるため、見通しをもって学習に取り組むことができる」という返答があった。

以上から、サティスファイドとディサティスファイドから社会を捉える視点は、汎用性や応用性が高く、地理学習においても有効であると考えられる。

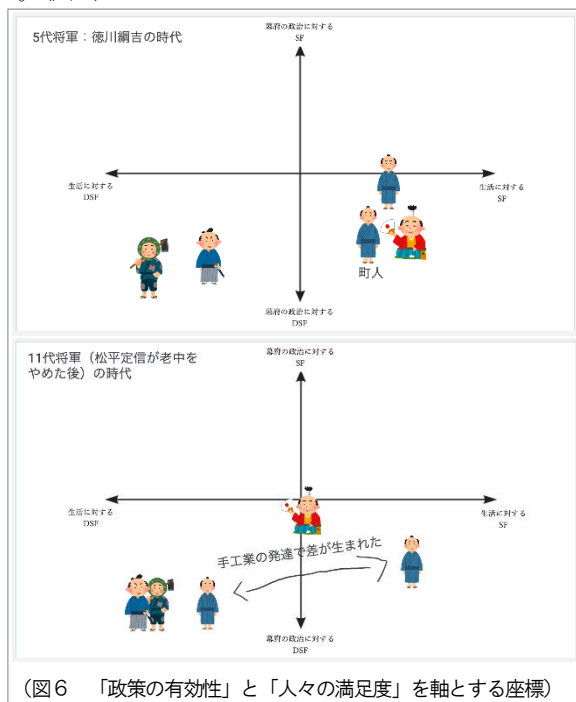
##### (2) 矢崎祐亮教諭（焼津市立焼津中学校）の授業実践

矢崎教諭は、歴史的な分野B（3）「近世の日本」を扱った。矢崎教諭の授業実践では、江戸時代の各時期の治世下での武士や町人、百姓のサティスファイド、ディサティスファイドについて整理した上で、江戸時代を通しての政治の安定度について考察し、グラフにまとめた。

サティスファイドな立場は体制の維持を求め、ディサティスファイドな立場は社会の変容を求めるという仮定から、単

元の学びは江戸幕府の政治の安定度を考察する際、直結する材料となった。260年続いた江戸幕府であるが、決して盤石ではなかったということに気づく生徒が多かった。

単元の中で、江戸幕府の治世について「政策の有効性」と「人々の満足度」を軸とする座標に、種々の立場を当てはめた。(図6)



(図6 「政策の有効性」と「人々の満足度」を軸とする座標)

いくつかのグループでは(図6)のように、サティスファイドとディサティスファイドの二分化を入口にすることで、同じ町人でも商人や職人、江戸の町人や地方の都市の町人など、同じ身分によっても満足度や充足度が違うという点に着目した。授業者が立場を分け、与えられた立場について生徒が考察するアプローチよりも、より主体的な学びとなり、多面的・多角的な考察を実現できるものであると考える。

また授業を行った矢崎教諭からは、授業を構想する際にどんな視点で考えさせたら良いか、軸がはっきりしていて単元を組み立てやすいというフィードバックが得られた。

## 5. 終わりに

人類が誕生してから現在に至るまで、社会は常に変容し続けており、未だに社会の最終的な形態は見られていない。ある社会と別の社会が出会えば、そこで新たな変容が求められる。例えば、ここでは言及しなかったが、島田中学校での関東地方の授業実践では、東京とその他の地域との関りによって生じるサティスファイドとディサティスファイドを追究することで、受益圏と受苦圏の存立に気づき、よりよい社会

の在り方を構想する生徒の姿があった。

変化し続ける社会の中で生徒たちに求められる資質とは、どのような社会に向かっているか考察し、またどのような社会に向かうべきか構想する力ではないだろうか。

良くも悪くも社会を変容させようとしている人々にはどのようなディサティスファイドがあるのか、良くも悪くも社会の変容を妨げようとしている人々にはどのようなサティスファイドがあり、その変容はディサティスファイドが生じさせるのか捉えられること、地域紛争から法律の制定、町おこしや技術革新にいたるまで、その動機と反動を捉えられることが、これからの社会をつくっていく生徒に求められるのではないかと考える。

※(図5)の記述の掲載については、当該生徒の承諾を得ております。

## (参考文献)

- ・小林弘力、多々良駿介(2021)「中学校社会科における政府と国民の関わり方を構想する力の育成の考察」『静岡大学教育実践総合センター紀要』
- ・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告知)解説理科編」学校図書
- ・唐木清志(2016)『「公民的資質」とは何か』、東洋館出版社
- ・澤井陽介、加藤寿朗(2017)『見方・考え方(社会科編)』、東洋館出版社